

**平成25年度相模原市協働事業提案制度事業
藤野の歴史的建造物めぐり
(第10回ふじの里山古民家ツアー)**

「藤野の歴史的建造物めぐり事業」は、本市の協働事業提案制度で採択された事業で、これまでNPO法人ふじの里山くらぶと横浜国立大学大学院大野研究室が取り組んできた藤野地区の古民家等の調査、資料作成、イベントの開催などを行うもので、平成24年度から街づくり支援課が加わり、今年で2年目となる。この事業は、それぞれの役割を分担し、地域の宝である歴史的建造物を保全・活用し、地域振興に繋げるものである。

主催／協力

主催：藤野の歴史的建造物めぐり協議会（NPO 法人ふじの里山くらぶ、横浜国立大学准教授大野敏）、相模原市
協力：藤野商工会、藤野観光協会

講師

横浜国立大学大学院：大野敏准教授
大学院生（石田さん、魚返さん、保甫さん、栗柳さん、西本さん、平坂さん）

日時

平成25年9月28日(土) 9:00~16:30

参加者／参加費

参加者：52名
参加費：3,500円（バス代、昼食、資料、保険代）

行程

藤野中央公民館（開会）⇒井上家⇒神原家⇒昼食「ふる里」⇒八幡神社（本殿）⇒佐々木家⇒大石神社（本殿、拝殿）⇒吉野宿ふじや⇒塚本家⇒藤野中央公民館（全体の集い）



●開会

主催者である藤野の歴史的建造物めぐり協議会永井会長、相模原市街づくり支援課長からあいさつの後、講師の横浜国立大学大野先生、大学院生の紹介を行った。



●井上家住宅主屋

建築年代：明治25年（1892年）家伝
構造型式：桁行25m x 梁行9m、一部二階建て
入母屋造り、ステンス瓦棒葺

家主の井上さんから建物の歴史に関する説明、大野先生、大学院生の栗柳さんから建物の特徴等の説明が行われた後、建物内・外の見学を行った。

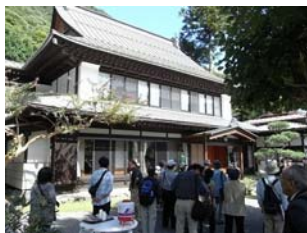
（建物の特徴と家主さんのお話し）

- ・屋号は「クラ」、大川原組の組頭を務めた。
- ・家裏の滝ノ沢は水質良く、上野原への主要道沿いであったため、天保10年から昭和7年まで酒屋を営んでいた。
- ・11代当主八十助氏は、天然理心流の師範で、敷地内に道場を設け、門下生に剣術を教えていた。



- ・南北の階数を変え、傾斜地に上手く建設されている。
- ・山地の民家である一方で、式台玄関、屋根の軒反り・装飾、内部の趣味的細工に格式の高さや豪勢さなど他の民家にはない特徴がみられる。
- ・屋根は、元草葺であったが、大正頃トク葺にし、平成18年に維持管理しやすいステンス瓦棒に葺き替えた。
- ・2階には、客室や儀式の間があり、全室が廊下で繋がっている。
- ・1、2階ともに格天井となっている。また、建具は、住込みの大工吉田建熊氏が13年間かけ制作したといわれ、各部屋で文様が異なる。
- ・チャムには、細工の巧妙な押入や書院があり商家

の趣が残っている。



●神原家住宅長屋門

建築年代：19世紀初期頃

構造型式：桁行20.0m x 梁行3.6m

入母屋造、茅葺（杉皮葺）鉄板覆い
家主の神原さんからユーマあふれる建物や地域の歴史に関わる説明、大野先生から建物の特徴の説明が行われた。

（建物の特徴）

- ・先祖は今川家重臣で駿河蒲原城主を務めた。
- ・新編相模国風土記稿に屋敷図が掲載される旧家で、家相図によると桁行16間・張間7間半に下屋が取り付く大建築であったが、昭和27年に取り壊された。現存する歴史的建造物は長屋門のみであるが、屋敷奥にある墓地は、当家の歴史と家格をよく伝えている。
- ・現状の長屋門は、桁行9間・梁行2間・入母屋造・茅葺型銅板葺屋根の建物で東面し、中央3間を通路としその両脇に部屋がある。



- ・この家は、昔、村役場を務めたことがあった。
- ・また、酒屋を商っていた時期もあったが、都合により、大川原の井上家に権利を譲った。



●屋食「ふる里」

お食事

- ・すいとん
- ・お刺身
- ・揚げ物
- ・サラダ
- ・混ぜご飯
- ・お漬物
- など

牧野地区でお食事処といえば「ふる里」さん、これまで、建物調査や過去の古民家ツアーでの昼食場所として何度かお世話になっている郷土料理の昼食をいただいた。

●八幡神社本殿

建築年代：延享元年(1744)棟札写

構造形式：一間社（間口1.8m、身舎奥行1.5m・庇奥行1.4m）入母屋造・正面
向唐破風付、こけら葺銅板葺

氏子総代の佐々木さんから建物や神社の歴史に関わる説明、大野先生から建物の特徴の説明が行われた後、建物内・外の見学を行った。

（建物の特徴と氏子総代さんのお話し）

- ・「新編相模国風土記稿」によると牧野村十五組の鎮守で別当は蓮乗院である。
- ・境内は南北に細長く、北奥に拝殿、幣殿、本殿が南北に連なり、西南に神楽殿が東面する。



- ・棟札の写しによると、本殿は寛保三年（1743）に起工、翌延享元年落成で、棟梁は下野国（栃木県）大森三左エ門と判明する。北関東系の大工であることから、装飾性が高い。
- ・間口一間（6尺）、奥行一間（5尺）、入母屋造屋根を持つ身舎正面に唐破風屋根付の向拝を設けた一間社。
- ・特に、水引虹梁上の竜、懸鼻の唐獅子と猿、唐破風下の力神などの彫物が特徴的。
- ・屋根は、現在は銅板葺きで覆っているが、本来はこけら葺だった。
- ・県西部における江戸時代中期の社殿の中では装飾性が高く、保存状態が良い点と併せて貴重な歴史的資産である。



●佐々木家住宅主屋

建築年代：嘉永7年（1854）家伝

構造形式：桁行11間、梁行7間、切妻造・瓦型鉄板葺（元茅葺）（1階庇は鉄板瓦棒葺）

大学院生の石田さん、魚返さんから屋敷や建物の特徴の説明が行われた後、建物外観の見学を行った。

（屋敷と建物の特徴）

- ・屋号は「オキ」といい、以前は馬喰問屋を生業しており、質屋も行ってたという。また昭和30年代までは養蚕を行っていた。
- ・現在の佐々木家の屋敷は、中央に主屋で裏には山があり、切り立った斜面となっている。
- ・主屋の他には、北側にモノオキ、東側にコクグラ・ミソグラの建物がある。
- ・以前は現在の道路を超えた南東側も屋敷だったが、昭和50年代の町道建設の際、土地を提供し屋敷が狭くなった。
- ・以前の屋敷は、川や道路から一段高い所にあり、背面に山を抱えている名主屋敷の形式だった。



- ・主屋は、嘉永7年建築と伝えられている。
- ・平面構成は、東側がダイドコと呼ばれる土間、北側に畳敷きのカッテ、南西に六間取り、南東には縁側があり、藤野地区に現存する大規模な民家で、現在でも風格を感じられる。
- ・当時から、トイレや風呂が家の中にある珍しい家だった。
- ・ザシキには、信仰対象の札などを貼るための押板が残されている。
- ・ザシキとゲンカンとの境には、幅3尺以上の立派な一枚板の板戸がある。
- ・ダイドコとザシキの境には、大黒柱と小黒柱と呼ばれる太い柱がある。
- ・屋根裏は、2層になっており、梁が整理された大空間となっている。
- ・1階庇は軒高が高く、べんがらが塗られた出桁造となっている。



●大石神社（本殿、拝殿）

建築年代：宝暦8年頃(1758)社伝

構造形式：1間社流造、こけら葺、正面4.08尺（1.45m）

大野先生から建物の特徴の説明が行われた後、建物内・外の見学を行った。丸山さんの指導により、参加者による舞台回しが行われた。

（建物の特徴）

- ・「新編相模国風土記稿」によると別当は蓮乗院で、篠原組の鎮守とする。
- ・参道を降りていくアプローチは特徴的である。
- ・本殿は、覆屋内に安置されており、通常は見えないが他の神社本殿に比べると小規模で簡素な意匠の朱塗りの一間社流造社殿である。
- ・拝殿は、回り舞台を備えた本格的農村歌舞伎舞台で、本殿覆屋前に建ち、舞台背面の格子戸越しに本殿を拝する珍しい形式となっている。
- ・拝殿の後半部（南西側）には、大梁が架けられ中二階を設け楽屋となっており、楽屋から渡りが設けられ出語りに通じている。



●吉野宿ふじや（旧大房良顕家住宅）

建築年代：明治30年(1897)、「人足控帳」

構造形式：桁行8間、梁行5間、2階建、1階は背面に下屋付（後補）、切妻造・瓦棒鉄板葺（元板葺）、桁行14.4m

管理人の長田さんから建物や地域の歴史などに関わる説明、大野先生から建物の特徴や模型を用いた吉野宿に関わる説明が行われた後、室内の見学を行った。

(建物の特徴)

- ・明治 29 年の吉野大火まで「藤屋」の屋号で旅館業に従事し、大火の翌日から早速再建に取りかかり、翌 30 年中に竣工したと考えられる。
- ・大正 2 年には、北白川殿下の宿営に対応した履歴がある。
- ・屋根構造は、登梁で間隔の広い母屋桁を受けており、当初は板葺きと想定される。
- ・正面軒を出桁造とする点や「通り土間」的な庇屋根を設ける点などは、町家の特徴といえる。
- ・オクノマは、床・棚・書院を備えた正座敷で、天井も高く根太天井である。



●塚本家住宅主屋

建築年代：明治初期(1876 年頃)

構造形式：桁行 9 間、梁行 5 間

切妻造、鉄板覆い

塚本家は、交通量が多い国道 20 号沿いカーブに位置するためバスが駐車できないため、大学院生の西本さんより、車窓から建物の特徴の説明が行われた。

(建物の特徴)

- ・塚本家は、小湊地区に所存し、先祖は加賀藩士であったが、江戸時代にこの地に移住されたと推定される。
- ・現在の家屋は、相模川対岸の空家を明治初期に買い取り移築したもので、外観は町屋風 2 階建となっているが、実際は、1 階、中 2 階、大柵の 3 層構造となっている。
- ・移築当初から、養蚕で生計を立てており、明治には蚕の仲買業を行っていた。
- ・1 階は、藤野地区に多く見られる四間取りとなっている。
- ・交通量が多い甲州街道沿いに面しており、道幅が狭く、カーブに位置することから、南東部の軒が自動車と接触することがあったため、角が

切り落とされている。

- ・向かい側の甲州街道の一里塚の近くにあることから、「塚本」という苗字になったと考えられる。



●全体の集い

見学が終了した後、藤野中央公民館で全体の集いが行われ、参加者と大学院生から感想、意見などが述べられた。



事務局から

今年、協働事業 2 年目を迎え、里山くらぶと大学は、地元調整や学術的な知識提供等を担い、行政は広報活動や団体や大学の支援など行い、それぞれの特性を活かし役割を果たせた。

例年、大野先生の指導のもと、大学院生が調査に加わり、活躍していることは大変頼もしく、地元の方にも刺激となっているものと思われる。

また、企画、準備段階から一貫して昨年度の反省すべき点を改善し、古民家ツアーに臨んだことにより、参加者のアンケート結果は満足度が高く、多くの方から本事業が支持されたと判断できる。